

月刊

# こころのとも

第十卷

八月号

## 人生で大切なこと

人生で

大切なこと

多くない

悪を為さずに

善を為せ

幸せ自然に

訪れてくる

そのためひたすら

こころを磨け

こころを響かせあつて

ひびきのさとの主張

これからは

自己主張をひかえ

お互いに

こころを響かせあつて

生きていこうよ

# 人生を考え直して

## みたい人は（六七）

『正法眼蔵』解説（一一）

現成公案を続けます。

うをの水をゆくに、ゆけども水のきはなく、鳥そらをとぶに、とぶといへどもそのきわなし。しかあれども、うをとり、いまだむかしよりみずそらはなれず。只用大（ようだい）のときは使大（しだい）なり。要小（ようしょう）のときは使小（ししょう）なり。かくのごとくして、頭頭（ずず）に辺際をつくさずということなく。処処（しよしよ）に蹈翻（とうほん）せずといふことなしといへども、鳥もしそらはをいづれば、たちまち死す。魚もし水をいづれば、たちまち死す。以水為命しりぬべし、以空為命しりぬべし。以鳥為命あり、以魚為命あり。以命為鳥なるべし、以命為魚なるべし。このほかさらに進歩あるべし。修証あり、その寿者命者（じゅしゃみょうしゃ）あることかくのごとし。

毎号使っています玉城康四郎氏の訳より、分かりやすいと思いますので、今月号は、増谷文雄氏の『現代語訳正法眼蔵』（角川書店刊）を参考までにあげておきます。

魚が水のなかをゆく。どこまで行っても水の際限はない。鳥が空をとぶ。どこまで飛んでも空に限りはない。だが、魚も鳥も、いまだかつて水を離れず、空を出ない。ただ大を用うるときは大を使い、小を要するとき是小を使う。そのようにして、それぞれどこまでも水をゆき、ところとして飛ばざるはない。鳥がもし空を出ずればたちまちに死に、魚がもし水を出でなければどこに死ぬ。水をもって命となし、空をもって命となすとはそのことである。鳥をもつて命となし、魚をもつて命となすのである。いや命をもつて鳥となし、命をもつて鳥となすのであろう。そのほか、さらにいろいろといえようが、われらの修証といい、寿命というも、またそのようなのである。

はじめの三分の二ほどは、ほとんど難しいところはなと思います。誰でもが納得のいくことだと思えます。問題なのは、終わりの辺りの、現代語訳でいいますと、「水をもつて命となし、空をもつて命となすとはそのことである。」以降です。少し解説しておきます。

魚は水のなかを泳ぎ、鳥は空を飛ぶ。これが、魚と鳥の本質的条件であると言えます。このことはどなたも、お分かり頂けると思いますが。

ところが、次の「鳥をもって命となし、魚をもって命となすのである。いや命をもって鳥となし、命をもって魚となすのであろう。」の部分になりますと、途端に、常識から飛躍していて、理解しづらくなります。現に、諸先輩の解説を読んでも、満足のいくものはありません。

実は、この部分は最後の「このほかさらに進歩あるべし。修証あり、その寿者命者（じゅしゃみやうしゃ）あることかくのごとし。」と対比をなして解釈しなければならぬのです。

「鳥をもって命となし、魚をもって命となす。逆に、命をもって鳥となし、命をもって魚となす」とは、鳥や魚と命とが一体不離であることを言っています。つまり、それは、あるがままあるだけの存在だということです。

ところが、私たち人間は、なかなかそうあるわけにはいきません。自分の失敗や身内に起こった不幸などはいつまでもよくよと思ひ煩ひますし、人に優つてできたことは、自信、いや過信を生み出し、未来に向かって計らいをめぐらせます。とても、あるがままある、という

わけにはいかないのです。不安になり、絶望の淵をさまよつたり、得意になり、自己肥大して傲慢になつたりするので。

ですから人間では、「このほかさらに進歩あるべし」なのです。人間は、動物から進化して、動物にはない「精神」を手に入れることができました。しかし、それは、精（自己）と神（他己）の分裂を体験する道でもありません。他者に開いた「己」「他己」を持つことで、失意したり得意になつたりするようになったのです。ここに人間だけがもつ苦しみがあるのです。

この苦しみを超克する道が、釈尊をはじめ老子、ソクラテス、キリストの四聖が説かれた教えなのです。

道元のことばで言いますと、次に出てきます「修証あり」なのです。私たちは、どこまでも、ひたすら修行に励み、悟りの自内証をうるように精進しなければならぬのです。進歩あるべしなのです。

そうした精進をして進歩するとき、はじめて、「寿く者」が「命を生きる者」であり、命を生きる者が寿く者である世界が、こころの中に出てくるのです。

それは、私のことばで言いますと、無意識の生命意識と如来意識とが統合される世界であり、「あるがままにある」ことができる世界なのです。

# 自作随筆選

## 人違い体罰

七月十七日大阪市立の中学校で、二年生女子生徒が、非行をしたということで、生徒指導主事の男性教諭から体罰を加えられました。しかも、それが、同姓の生徒と人違いで、全治五日間ものけがだったということです。

その時に、校長は、次のように話したようです。「子どもは悪いことをしてもすぐに正直に話さないから、現場の教師は厳しい指導をして、本当のことを話させている。今回、指導主事はすぐに白状しなかつたので興奮して殴つたようだ……。」

この事件と校長の話は、現在の生徒と先生の関係や教育現場の状況をよく表しているように思われます。

基本的に言えますのは、生徒と先生の間信頼関係が失われているということです。先生が生徒を信じないから、生徒も先生を信じないのか。その逆なのか。相互作用なのか。

教育という関係は、教える側がまず信頼をすることが大切だと思えます。それは、教師に限らず、子どもを育

てる大人一般にも言えることです。大人が信じなくなっているから、子どもも教師や親を信じないのです。すると、この指導主事のように生徒が「私やない」と正直に言つていても信じられず、「嘘をつくな」と言つて、殴らざるを得ないということになるのです。

いま、特に日本人は宗教意識が希薄で（世界一なのかもしれませんが）、神や仏を信じなくなっています。それは、人を信じないということでもあるのです。いま、学校教育でも、「思想はどれが正しいということはないのだから、人それぞれが、思想をもて」と教えているようです。でも、教師自身の言う事は、正しいから信じなさいということのようですが。

次に、言えますのは、教師の暴力傾向が強まっている、ということことです。「子どもは正直に話さない」から、白状させるためには、「厳しい指導をして」、暴力を使わなければならぬ、ということだと思えます。これも、信じることと同様で、大人に応じ生徒の暴力傾向も強まっています。ですから、言葉で言った位では言うことを聞かないのです。

いま、一般的に、日本人は急速に暴力傾向を強めているように思われます。とても、危険です。信仰を失い、他己を萎縮させたものにとって、自己を安定させるもの

は、欲望の満足以外にはありません。主として食欲（物欲・金銭欲を含む）と性欲（子孫繁栄欲・民族繁栄欲を含む）と優越欲（権力欲・出世欲・勝利欲を含む）の満足です。

しかも、この欲望の中、食欲や性欲の満足を保障するためには、他者に打ち勝ち、優越する必要が起ります。それは、いわばファシズム、暴力肯定への道です。今、日本では、戦力を保持できるようにしようとする憲法改正の機運が強まっています。タカ派の候補者が知事選に高得票で当選しました。大東亜戦争を肯定するマンガが売れ、国歌、国旗を法制化し、プロレタリアート革命をめざす共産党を除いて、殆どの政党が、与党化しています。甘い汁を吸えそうだと、いつでも与党（自民党・多数党）に加わります。実は、こうした傾向を今、子どもたちも共有しているのです。

緊急に、学校（いな日本）がやるべきことは、自分たちを超越して絶対の境地に到達した、四聖と呼ぶべき釈尊と老子とソクラテスとキリストを信じ、その教えに則って生活するようにすることなのです。それは、私のことばで言えば、他己を回復することです。自己肥大を矯正し、自己を犠牲にしても他者を幸せにする、真の信仰が求められているのです。

## 驚きの文相発言

七月十八日付けの読売新聞の「ことば」欄に次のような記事が載りました。

有馬文相

国よっているいろいろ違いはあるが、日本のように国旗・国歌に対する尊敬の念のない国はまずない。小学校、幼稚園からしつけなければだめだ。『全人類を愛しましょう。世界を平和にしましょう』とだれもが口にするが、自分の国を愛せないように、世界、人類を愛することができるだろうか。国を愛するという心の教育をきちんとやって行かなければならない（東京・千代田区のホテル・ニューオータニでの自民党全国研修会での講演で）。

読んで、驚きました。これを記事にした記者の意図がどこにあるのか、私には分かりませんが、かつて、最高学府の最高位にある東大の元総長で、いま文部大臣である人が、こんな発言をするとは、飛躍していると言われるかもしれませんが、日本の教育が荒れるのも無理のないことと思えてしまいます。

## 自作詩短歌等選

### 若者は離人症的

精神科医は  
今の若者は  
離人症的だ  
という

それを  
私に言わせれば  
自分のたましい（自我 人格）が  
あたま（認知言語）と  
からだ（感覚運動）と  
こころ（情動感情）から  
遊離して  
現実感を失い  
他人がしているかの  
ように感じてしまう  
ということ

いま、日本人がナショナリズムに傾いていることは、前にも指摘しました。他己を萎縮させ、社会への地位を欠く者が陥る落とし穴は、ニヒリズム（自己不安）かファシズム（自己拡張）なのです。

前掲しました、文相の話を読みますと、この人も、国粹主義（ファシズム）に陥っているのではないかと危惧されます。

かつて、軍国主義が風靡していた時のように、自分の国を守るために身命を投じるのではなくて、人種・性別・宗教・障害の有無などを問わず、無条件に他者を幸せにするために、自分を投げ打って奉仕・お布施できる人を育てることが、「こころの教育」なのです。自分の国を守るのは単なるエゴの追求でしかありません。そんなものは、こころの教育とは言わないのです。これを読みますと、文相自身が、「こころの教育とは何なのか」すら、分かっていないように思えます。

いま教育学者をはじめ、教育への提言をする人たちの殆どは、管理をゆるめて子どもたちのストレスを減らすことと癒すこと、自己を拡張させることしか言っていない。それが、こころの教育ぐらいに思っています。

これでは、ますます自己肥大をもたらし、社会を崩壊させる方向に向かって進んでいくのです。

## 男の暴力克服の道

ついかつとなつて  
家庭で  
暴力をふるつてしまい  
自分を抑えられない  
男性が  
増えているという  
思春期・青春期暴力  
子ども虐待  
高齢者虐待  
きょうだい間暴力  
夫婦間暴力  
などなど

日本でも  
アメリカのように  
刑事処分と  
治療プログラムが  
必要になっている

積尊の説かれた  
五戒の一番目  
不殺生（無暴力）戒が  
ますます  
守れなくなつて  
来ているとは

## 愛の争奪戦

私と仲のよい  
あの人が  
私以外の人と  
仲良くしているから  
腹が立つ

いま  
互いに  
愛の争奪戦に  
陥っている

## 死んで二人連れ

二人墓  
生きてるうちは  
添えないが  
死んだら共に  
眠らんとする

## 大量自殺者社会

自殺者が  
交通事故死の  
三倍も  
いるこの社会  
崩壊のきざし

犬より劣る人間？

盲導犬や介助犬を見よ

犬は

**弱みと強み**

どんな仲間にあっても

喧嘩しないように

弱みを強みに

嫉妬することができ

変えるということ

なのに

いまの世は

人間は

自らの弱みを

世界中で

権利として

喧嘩ばかりしている

主張し

**大学も学級崩壊**

強みに変えていく

社会

大学も

学級崩壊

起こってる

出入りはするわ

私語もやめない

## 釈尊のごとば（八三）

法句経解説

（二八五）自己の愛執を断ち切れ、池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を養え。めでたく行きし人（＝仏）は安らぎを説きたもつた。

「自己の愛執を断ち切れ」とありますが、勿論、ここで言う愛執は、いわゆる愛欲やいわんや、無私の愛のこととを言っているではありません。もちろん、愛欲も含まれてはいますが、ここではもつと一般的に、私の言う自己の情動の中の、「欲望への執着」のことを言っているのです。このことにつきましては、毎回のように出てきていますので、もう言及の必要はないほどです。

ただ、ここで言っていますのは、欲望そのものを断ち切れと言っているのではないことに注意しなければなりません。欲望そのものを断ち切りますと、人間は生きていくことはできません。欲望そのものは、私の言います「自己」の無意識にある「生きる力」「生命力」の現れですから、それを否定することは、生きる力そのものを否定することになります。欲望への執着を断ち切るという



ことは、欲望そのものを否定することではありません。私のことばで言いますと、それは、「他己」を無視あるいは軽視した結果起こる自己肥大の現れとしての執着をやめることです。

普通のことばで言いますと、欲望を貪ることを禁止するものだといつてもよいと思います。食欲について言いますと、例えば、世界中には、飢え死にしている人が、今も一日何千人もあり、そのことを知っているのに、おいしいからといって、あるいはお金でいくらでも買えるからといって、平気で肉を食べるような行為は、欲望へ執着していることになります。

それは、性欲についても言えます。連れ合いがいるのに、浮気心をだして異性と付き合ったり、いわんや性行為に及んだりすることは、そういえませし、たとえ独身だからといって、ただ性欲の追求のために性行為に及ぶことも、そう言えます。なぜなら、例えば、そこらじゅうの男性と寝た女性を嫁にしたがる人は、めったにないでしょうし、逆に女好きのドンファンDon Juanの男性を自分の娘の婿にしたがる人も、普通は、いないからです。

自己の欲望の追求に執着しなければ、他者のこころにも配慮できるのです。人間の人間たるゆえんは、人のこころに配慮できることなのです。自分を制して、他者に

配慮できることなのです。だから、自己の欲望への執着を断ち切らなければならないのです。

次の「静かなやすらぎに至る道を養え。めでたく行きし人（ハハ）は安らぎを説きたもうた。」に移ります。

ここで言う「静かなやすらぎに至る道」とは、いわゆる「ニルヴァーナ」に至る「八正道」のことです。「静かなやすらぎ」とは、ふつう、家で静かにくつろいでいるときのことを言っているのではないのです。「涅槃寂靜」と言えるような、絶対な安静の境地なのです。それは、全てに満たされていて、「いますぐに」でも、お迎えがきたら、「喜んで」逝けるという境地なのです。

そうした境地にいたる道が八正道なのです。既に、何度も出てきましたが、それは、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定、です。皆さんも、そうした安らぎに至りたいとお思いになりませんか。その道を釈尊は説かれたのです。

(二八六)「わたしは雨期にはここに住もう。冬と夏とはここに住もう」と愚者はこのようにくよくよと慮(おも)んばか)って、死が迫って来るのに気がつかない。

この偈では、四季によって住処（すみか）を変えることに配慮して、死が迫っていることに気づかない、と言っています。これは衣食住の中の一つの例として「住」をあげているに過ぎません。言いたいのは生活全般について、愚者（「ふつうの人」）は、いろいろ思いめぐらして、哲学のことばでいいますと、日常性に類落（たいらく）して、死に代表される苦しみを忘れて、ということなのです。

現代では特に、死が日常から隠され、大多数の人が病院や養老院のベッドの上で死を迎えています。また、死以外のその他のいわゆる四苦の中の生老病も、忘れられる傾向にあります。

生の苦しみとは、自分の思うとおりの自分に生まれていないという苦しみですが、現在では、自己に閉じていて、自分の欠点が自分の長所だと思うほどに、皆が傲慢になっています。ですから、自分の生の苦しみを苦しむほど、ところが豊かではなくなってしまっているのです。

また、老も病も、そんなに苦しみではなくなっています。老いるときの苦しみは、自分が老いることで生計がたたなくなつて食っていけないのではないか、また、動けなくなつたら、生活できなくなる。その結果、養ってもらつたり、介護してもらつことで、他者に迷惑がかか

るのではないか、という不安にあります。でも、いままでは、そんな心配は日本では、ほとんどなくなつて来ています。国民皆年金制度のお陰で、誰でもが年金を貰っていますし、病気になつても保険制度のお陰で医者にかかることが出来ます。病院や医者が老人のサロンのようになっていくとよく言われました。また、動けなくなつても、家庭での介護に欠ければ、老人ホームで介護を受けることができます。

日本のように経済的に豊かになり、個人主義・民主主義が進むほど、この偈にいいますように、贅沢な自分の欲望の満足ばかりに、ますますつつつをぬかすようになり、自分の苦しみを見つめなくなつて来るのです。つまり、人間的に成長する契機（チャンス）を失つてくるのです。嘆かわしい限りと言わなければなりません。

（二八七）子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執着している人を、死はさらつて行く。  
眠っている村を大洪水が押し流すように。

この偈には、抵抗のある方がおいでになるのではないのでしょうか。

自分の子どもに、気を奪われていると、そんな人は死

にさらわれていく、と言われても、親が子に愛情をかけたのでどうするのか、と思われれると思うのです。

ですから、この偈は、誤解されそうで、とても怖いように思えます。

いま、日本でも幼児虐待事件が年々増加しています。この偈を信奉しているわけではないのですが、子どもに気を奪われることがない親が、だんだんと増えていると言えそうです。

昔は、「ままこいじめ」というのがありました。再婚した母が、先妻の子をいじめるところが、その典型だったと思います。ところが、最近では、実子をいじめて死に至らしめる母が、後を絶ちません。父を含めれば、年間で五十件ぐらいは起きているのではないのでしょうか。こんな傾向に対応するために、虐待一〇番が開設されていますが、繁盛しているようです。

釈尊が、この偈で人々を戒められた頃は、こんなことはなかったと思われれます。子を亡くした母の深い悲しみを釈尊が慰められた話が、経典に載っているからです。

どうしてこうなってしまったのでしょうか。

私は、これは、私の言う「他己」が人々の精神の中で萎縮し、人を愛せなくなり、信じられなくなった結果だと思っていますのです。

釈尊はこの偈で、人々がもつとも大切だとするものにも執着するな、と戒められているのです。ところが、いまでは、自分の欲望の追求だけに、ますます強い執着をもつようになっていて、子というもつとも身近な他者にすら、人には愛情や関心を持たなくなっています。ですから、この偈は逆効果になってしまっています。そこで、未法の世は進んでいると言えるのです。

釈尊は、自分の子や財産だけではなくて、自分にとつて最も大切な命にすら、執着してはならない、と教えられています。

私たちは、自分が執着するものが失われるとき、失望感が起こり、不幸だと感じてしまいます。

宗教のめざすものは、自分の肉体の滅亡（死）を含めて、自分の精神以外の環境がどんなに変化しようと、精神は不動である、という境地を確立することです。

そのたとえとして、子があげてあるのです。決して、子を愛さなくてもよい、とおっしゃっているわけではありません。子を愛するのは当たり前ですが、それに執着してはならない、とおっしゃっているのです。親の深い愛に支えられてだけ子はまともな育つことができます。

真の愛は自己犠牲です。徹底した自己否定です。実は、それは執着の否定でもあるのです。

後記

- 一、暑い日が続いています。今年は、西日本には台風がたくさん襲来し、四国や九州には雨が多く降りました。
- 二、私の身边にも変化がありました。念願の農地になりうる土地を入手することができました。同じ引田町の山手のほうです。地目は山林で、山からセメントの材料をとった跡地で、平地なのですが、木が植えてあります。いま、その木を切り倒し、草を刈って、一部、畑に開墾中です。切株を掘り取るために小型のパワーシャベルの中古を安く購入することができました。
- 三、この話が進行中から、私が主食にしていますさつま芋と大豆を、少しばかり植えさせて頂いていました。順調に育っています。いま開墾中の土地には、秋植えのジャガイモを植えたいと思っています。また、秋蒔きの野菜がこれからどんどん出てきます。どんなものを作っているか、できるだけ、報告させて頂きます。
- 四、私が、こんなことをしますのは、随筆で農業のことを書いたときにも、言いましたが、やはり食料はできるだけ地域的に小単位で、自給することが理想だと思っております。
- 五、一定の土地が人を養える力には限界があります。土地は、食料の生産だけではなく、そこに生えた木々は、

炭酸ガスを吸収し、人が生きていけるように空気をきれいにする働きももっています。

- 六、また、家を建てる材木も提供しますし、化石燃料にかわる燃料としても、大切です。
- 七、いま、私の家では、風呂は木を焚いて沸かしています。椎茸農家から不要になったほど木を貰って来て割り木にして燃やしています。これからは、その山林の木を切ってくれば、一軒で焚くだけの材木はありそうです。
- 八、いま、世界中が生活の快適性・利便性の追求にうかれ、享樂しすぎているように思えます。自戒したいと思っています。

月刊 こころのとも 第十卷 八月号 (通巻 一一六号)	平成十一年八月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

